広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	落語の国語科教材としての可能性 ： 落語に内在する「ものの見方や考え方」に注目して
Author(s)	青砥，弘幸
Citation	国語教育思想研究 , 32 : 1 - 9
Issue Date	2023-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054793
Right	
Relation	

落語の国語科教材としての可能性
―落語に内在する「ものの見方や考え方」に注目して―

佛教大学　　青砥　弘幸

キーワード：伝統的な言語文化、落語、ものの見方や考え方

0. はじめに

平成 20 年度版学習指導要領より、国語科の「内容」として「伝統的な言語文化」に関する事項が位置づけられ、その 1 つとして「落語」が国語科教材として取り上げられてきた。この流れは、現行の平成 29、30 年度版の学習指導要領にも基本的に引き継がれており、現在採択されている教科書にも古典落語を取り上げるものが複数確認できる（光村図書 5 年，教育出版 4 年など）。

当初「伝統的な言語文化」の教材として、様々な言語文化の中でも特に落語が取り上げられた理由は、その「親しみやすさ」にあったと考えられる。ユーモア的な内容を含む落語の噺は、学習者が楽しみながら古典に親しむことができるという点において有用な教材であると考えられたのだろう[1]。しかしその後、教科書が改訂を重ねるたびに採用する出版社が減少したり、巻末の資料的な扱いが増加したりするなど、徐々にその教材としての存在感は小さくなりつつあるように感じられる。

その原因については、小林ら（2014, p. 235）が「落語へのなじみも乏しく、本来「聞く」ものとして発達してきた落語を、文字化された教科書で、どのように扱い、何を教えればよいのか、とまどう現場の声も耳にされる」と指摘するように、その国語科教材としての価値や可能性、指導方法が丁寧に検討されてこなかったことによって、結果としてその「扱いにくさ」だけが教育現場に漂ってしまったことにあるのではないだろうか。

落語という言語文化を国語科教材として取り上げる必然性はどこにあるのだろうか。「親しみやすさ」という特性に加えて、落語でなければ学べない「何か」はないのだろうか。国語科教材としての落語の魅力が見失われ、姿を消そうとしつつある今、この問題についてもう一度改めて問い直すことが求められているといえるだろう。

そこで本研究では落語の文化的特徴を踏まえて、国語科教材、特に「伝統的な言語文化」に関する教材としての価値を再検討することを目指す。

そのためにまずは広く教育の文脈において落語の教材性について言及する言説を整理しその議論の全体像を確認する。そして、それを踏まえて国語科教育の中で行われるべき議論の方向性についての焦点化を行う。その後、その方向性に沿って、広く落語の文化的特徴についての知見を手掛かりとしながらその国語科教材としての可能性に迫っていく。

1. 議論の全体像と焦点化

教育という文脈のなかで、落語の教材性について言及する先行研究や落語を教材（活動）として取り上げる学習指導案や実践報告を概観し 、言語文化としてのどのような特徴が注目されているのか、具体的にどのような学習活動が展開されているのか、どのような資質能力の育成の可能性が指摘されているのかなどの観点から、これまでの議論の全体像を確認する[2]。

結果は巻末資料の通りである。

まず、その言語文化としての特徴については、主に「内容」「表現」「形態」の点から指摘されていることがわかる。

[1] 青砥が 2014 年に小中高校生 1404 人を対象として行った「笑いに関する意識調査」の中で、「授業以外の生活の中で、昔から伝わる落語やとんち話を、見たり読んだりすることはありますか」という質問に対して、小学生で 72%、中学生で 83%、高校生で 77%の学習者が「全くない」「あまりない」と回答している。古典に親しむ態度の育成という観点からもその成果については慎重な検討が必要である。

[2] 先行研究は学術データベース Cinii において「落語教育」、学習指導案に関しては検索サイト Google において「落語　学習指導案」と検索し、本研究の趣旨に沿うものを取り上げている

内容	・下げ（オチ）があること ・ユーモアを伴うこと（おもしろいこと） ・江戸時代の庶民の生活や文化を感じさせること ・特に「人間」というものに対する独自のものの見方や考え方を内包すること
表現	・対話、会話表現によって物語が進行すること ・扇子や手ぬぐいのみで、様々なものを表現すること ・パラ言語（声の強弱や調子、高低、速さ、間の取り方など）が芸としての重要な要素となっていること
形態	・一人の演者が複数の人物を演じわけること ・落語空間における演者と観客（聞き手）との対話的コミュニケーションとして成立すること ・基本的に既成の噺があり、それをそれぞれの演者なりにアレンジして演じられること ・繰り返し同じ噺が演じられること

また、落語という言語文化を取り上げ、主にどのような学習活動を展開しているかの類型については、主に以下のものが確認できる。

鑑賞する	・実演による鑑賞 ・DVD による鑑賞 ・音声（CD や範読）による鑑賞 ・読解による鑑賞
演じる	・実演する ・音読をする
知る・調べる	・所作や歴史、寄席の実際などについて知る ・その文化的な特徴を知る ・扱うテーマや人間観について分析する

さらに、その育成の可能性が示される資質能力は「水平的思考（創造的思考）」「論理的思考力」「想像力」「英語表現力」「日本語表現力」「運営力」「読解力」「音読力」「読書力」「情報収集力」など多岐にわたるが、総合すると以下の 3 つが主なものとなっている。

(1)伝統的な言語文化の享受・継承

落語を鑑賞したり演じたりすることや、その周辺的知識を知ることを通して、伝統的な言語文化についての理解を深めたり、親しむ態度を育てる

(2)ものの見方や考え方の深化・拡充

落語に内在するものの見方や考え方に触れることで、自身のものの見方や考え方を深化・拡充する

(3)コミュニケーション能力の向上

表現の幅を増やすことに加えて、パラ言語を含めた口頭表現の技術を向上させたり、伝える自信を深めたりすることを通して、言語能力を向上させる

落語の特徴としては、内容のおもしろさに加えて、日本の伝統的な生活や文化様式を感じさせるものであること、日本人の精神性や価値観を色濃く反映するものであること、自然な対話形式での表現であることなどが指摘されており、その観点から日本語学習の教材としてもその有用性が注目されていた。また、扇子や手ぬぐいのみで様々なものを見せる表現技術やパラ言語を巧みに使い分ける言語表現の技術などに注目し、落語の練習や実演を通してコミュニケーション能力の向上を目指すことができるという指摘が日本語教育や国語科教育だけでなく教員養成などの文脈でもなされ実践されていた。その際、特にこのような実践を伴う取り組みについては、その多くが、授業者自身が落語経験者であるか、経験者のサポートを受けて展開されていた。また、落語を鑑賞したり、演じたりするだけではなく、その文化的特徴や歴史、寄席などについて調べたりすることも、伝統的な言語文化としての落語に親しむ有意義な学習活動の一つであるとされてきたことが見て取れる。

では、このような議論を背景に、国語科教育では特にどのような観点から議論を深めていくことが求められるのか。「平成 29 年度版学習指導要領解説」の中で、「落語などを教材として用いる」という記述がある小学校第 5, 6 学年についてみると、「伝統的な言語文化」における指導事項は次の 2 つが挙げられている。

ア　親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。
イ　古典について解説した文章を読んだり作品の内容の大体を知ったりすることを通して、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

この 2 つの指導事項は先行研究が落語の可能性として指摘していた「(1)伝統的な言語文化の享受・継承」と「(2)ものの見方や考え方の深化・拡充」に重なるものである。

国語科として「(3)コミュニケーション能力の向上」などについてもその可能性は十分に魅力的ではあるが、音読レベルを超えて演じることを目指すとなると、長時間の取り組みや落語経験者の指導がどうしても必要となってくるだろう。また、その「表現」や「形態」の特徴について詳しく理解を深めて寄席を運営するというような探求型の学習についても、指導者の落語に対する深い理解やそれを可能にする人的、物理的な環境がなければ難しく、すべての国語科教室で目指すことは難しいかもしれない。とするならば、やはり国語科教育としてまず最も優先される議論は、テキスト化（あるいは映像化）された噺を教材として、指導事項にも通じている「(1)伝統的な言語文化の享受・継承」と「(2)ものの見方や考え方の深化・拡充」をどのように授業の中で目指していくのかということになろう。

この 2 つの方向性は、冨安（2018）の区別を用いると、それぞれ伝統的な言語文化を経験し親しむことを目指す「同化」と、伝統的な言語文化について分析し考察をする「対象化」と捉えることができる。そして、冒頭で述べたように、これまでの国語科教育が落語に見てきた可能性は、このうちの特に「同化」という側面が中心であったといえる。定番の古文や漢文作品と比較しても、口頭表現によるリズムの良さや内容のユーモア性などから「楽しみやすい」「親しみやすい」言語文化体験へとつながることが期待されてきたのである。

この「同化」という側面からも確かにその教材的可能性は十分に大きい。しかしその一方で、伝統的な言語文化への「同化」のみを目指すならば、落語はある種の弱点を抱えている。それは寄席という場に行き、生で見て聞く芸能（「落語空間に参加する芸能、演者と観衆が一体となる芸能）として成立してきたものを「教室においてテキストで読む（動画を見る）」といういびつな取り上げ方をせざるを得ないという点である。また、その内容についても、子供たちの口語に近い表現で書かれており、ある意味で「伝統的な言語文化らしさ（異質性）」が薄く「なぜわざわざ授業で取り上げてまで触れる価値があるのか」と感じる授業者もいるかもしれない。

このような点が、その「親しみやすさ」に期待が寄せられながらも、教材としての「扱いにくさ」を帯びてしまったり、取り上げる必然性が見えにくくなったりしてしまったりしているという現状をもたらしている。落語は伝統的な言語文化に「同化する」（楽しむ・親しむ）ことを目指す上で確かに有効な教材ではあるが、これまでのようにそれのみに教材としての価値を置く限りにおいては「必ずしも落語でなくともよいのではないか」という声が挙がってくるだろう。

一方で、学習指導要領が示す言語文化へ近接するためのもう一つのアプローチである「対象化」という側面についてはどうであろうか。

落語は何世紀にもわたり伝承され、庶民の芸能として我々日本人に親しまれてきた言語文化である。同じ噺が様々な噺家によって演じられ、いつの時代も、そして現代においても人々はそれを心から楽しむことができる。とするならならば、そこには、我々日本人が時代を超えて受継ぐ「何か」との共振がある、そして、それこそ「昔の人」と「現代を生きる私たち」が共有する「ものの見方や感じ方」であると考えることができるのではないだろうか。実際に、このような落語が内在する「ものの見方や感じ方」をその教材としての可能性として指摘するような声も今回の調査で多く確認された（（桂,2010）（住岡,2013）など）。この落語に内在する「ものの見方や感じ方」とは何かという議論を深めることが、「同化」だけでなく、「対象化」まで視野に入れた学習の開拓へとつながるであろうし、落語の国語科教材としての価値や可能性、独自性や必然性を検討していくためには不可欠であると考えるのである。

落語に内在する「ものの見方や感じ方」に注目した先行研究は国語科教育の文脈でも小林ら（2014）や中山（2020）などによって行われている。これらは「当時の人々の生活様式や文化に触れる」ことや「オチを分析的に解釈する」ことなどの有益な視座をもたらしているが、落語が本質的に内在する「ものの見方や感じ方」とはどのようなものであるのかという点についてはより詳細な考察を深める余地がある。

2. 落語に内在する「ものの見方や感じ方」とは

では、落語という言語文化に内在する、より本質的で独自の「ものの見方や感じ方」とはどのようなものであろうか。その最も特徴的なものとして、前章で取り上げたいくつかの先行研究（桂（2010）、住岡（2013）など）が言及するように、「人間」という存在に向けるまなざし、いわば「落語的人間観」が挙げられるだろう。

落語には、滑稽噺、人情噺、怪談噺などいくつかの類型がある。またそれぞれの噺に登場する人間の人物像は多様であり、その全てに共通する人間像を抽出すことは難しい。しかし、中村(2018, p. 20)が「人間がもっている多面性、あるいは、さまざまな人間の多様性が落語では描かれるのだ」と指摘するように、「人間は多様である、人間は多面的である」という人間理解こそ、まずは落語という言語文化全体に通底する「落語的人間観」の原則と捉えることができるだろう。愚かさ、間抜けさ、強欲さ、狡さ、誠実さ、気高さなど、「人間という存在のもつ多様性・多面性」をあるがままに捉え、それらを受け入れようとする眼差しが、落語には内在しているのである。

この「落語的人間観」についてさらに検討していく上で、本研究では、その大部分を占める滑稽噺に焦点を絞り検討していく。

「落語的人間観」に関わる有名な言説として、立川（1985）の次の言葉がある。

> （前略―引用者）私にとって落語とは、“人間の業”を肯定しているというところにあります。“人間の業”の肯定とは、非常に抽象的な言い方ですが、具体的にいいますと、人間、本当に眠くなると、“寝ちまうもんなんだ”といっているのです。分別のあるおとなが若い娘に惚れ、メロメロになることもよくあるし、飲んではいけないと解っていながら酒を飲み、“これだけはしてはいけない”ということをやってしまうのものが、人間なのであります(立川, 1985, p. 17)。

また、中村(2018)は、立川の言うこの「人間の業」が示すものについて、次のように解釈している。

> これは、人間の弱さであり、仏教的な言い方だと「他力」的なあり方だといえるだろう。意思や理性ではどうにもならず、感情や欲望にふりまわされ、それを満たす快楽におぼれてしまうわれわれの「情けなさ」みたいなものだろう(中村, 2018, pp. 17-18)。

つまり落語、特に滑稽噺で描かれるのは、人間という存在が本質的、普遍的にもつ「人間の業」であり「情けなさ」であるとしているのである。それは、例えば「寿限無」であれば、子どもを想う気持ちが強すぎるがゆえに合理的な判断ができない親の「愚かさ」であり、「饅頭怖い」であれば、饅頭を手に入れるために嘘をつく男の「ずる賢さ」、そしていたずらをして男をからかおうとする友人の「どうしようもなさ」なのである。

そして、もう一つの極めて重要な点は、落語はこのような「人間の業」を否定や非難せず受け入れるだけではなく、時にそれをある種の人間という存在のおもしろさや魅力として描くという点である。これについて、住岡(2013)は、いくつかの具体的な噺を分析し、その人間観の描かれ方の特徴について次のように述べる。

> このように「明礬丁稚」の定吉に向ける眼差しと「子誉め」の喜六に向ける眼差しに共通するものは、それぞれがともに許容的・受容的な人間観を根底においているということである。幼い子どもと大人という対象の違いはあれ、両者において表現される人間観（子ども像と阿呆像）はともに、相手の人格を丸ごと許容し受け入れる、温かい姿勢で貫かれている。そして、落語に登場する人物像、すなわち落語家が解釈し演じるこうした温かい人間像解釈は、「明礬丁稚」の定吉や「子誉め」の喜六に止まらない。全ての演目において、また大阪落語と東京落語の如何を問わず、落語に通底する基本的な人間観ということができる(住岡, 2013, p. 30)。

この住岡が指摘する様に、落語の世界は「人間の業」を描きながらも、それを否定したり非難したりすることなく許容的・受容的に受け入れ合うことで成立しているのである。「人間の業」に振り回されたり、それにあきれたりしながらも、それを笑い飛ばし「仕方のないねぇ」とある意味でそれを楽しむのである。その落語世界への参加のあり様は、登場人物も現実世界の我々も、そして同じ噺を楽しむ昔の人も現代の我々も同様なのである。現実であれば到底受け入れられないずるさや弱さを見せる登場人物にあきれながらも、ど

こかでそこに魅力を感じてしまい、どうしても嫌いになれない私たちがいるのである。

ではなぜ落語の世界では、なぜそのような許容的・受容的な「落語的人間観」が成立するのであろうか。それを可能にしているのが、まず1点目に、描かれる「人間の業」が、人間の本質的・普遍的なものであるという点である。我々は日々「人間とはかくあるべし」という縛りの中で、自身を律しながら生きている。「人間の業」を抑圧し、克服できるように「がんばりながら」生きている。しかし、自分のどこかにも確かにある（普段は見ないようにしている）そのような弱さやずるさに負けながらもいきいきと楽しく生きる落語界の人々の姿に触れることは、私たちにある種のカタルシスをもたらすのではないだろうか。

2点目にその描かれ方が「笑い」を伴うものであるという点がある。多くの滑稽噺では「人間の業」に動機づけられた彼らなりの計画や見通しが失敗してしまう姿が喜劇的に描かれる。我々は、彼らの「人間の業」やそれによって引き起こされる出来事に「笑わせられる」ことで、その逸脱を重大なもの、深刻なものとして捉えることができなくなってしまうのである。

このような落語の「人間の業」に向ける許容的・受容的な眼差しが今を生きる我々にどのような視座をもたらすのかについては、幸津(2008)が次のように述べる。

> 古典落語の登場人物たちは「いま」生きているわれわれに人間の愚かさについて教えてくれる。彼らはその話の当の「むかし」のことばかりでなく、「いま」にも通じることとして人間というものがどのように愚かであり、またどこまで愚かになりうるのかについて示している。われわれは、古典落語を聴くことで「これから」へと向かう一つの手がかりを得ることができる。つまり変わることのない人間の愚かさについて、そしてこの人間の愚かさを互いに受け入れることによって人間相互の関係を適切な仕方でつくることについて知ることができるのである（幸津, 2008, p. 10）。

この幸津の指摘する、自他の愚かさを認め合い、然る後にその先に向かっていくという思想は言うまでもなく仏教的である。落語が、江戸時代浄土宗の説教師であった安楽庵策伝が説教話のための話材を集録した『醒酔笑』に起源をもつとされるように、落語の噺には仏教の影響を強く受けたものが多い。特に浄土宗でいう「還愚」の思想、（自身の中にある人間の本質的な愚かさを認め、愚者の自覚をもつ（自己の相対化）ことが、まことの生き方につながるのだ）などは「落語的人間観」と密接に関連するものであると考えることができる。

ここまでを整理すると落語に内在する「落語的人間観」とその価値は次のようにまとめることができる。

> 人間とは多様で多面的な存在である。そして、私たちは皆、ある面において、情けなさや愚かさなどの「人間の業」を抱えている。しかし、それら人間としての自然な姿であり、完全にはとうてい克服しようもなく、それは批判されるものでもない。そのような自他の「人間の業」をまずは認め、受け入れ合い許し合う先に「では私（私たち）はどのように生きるのか」を考えることができるようになる。

このような「落語的人間観」が、落語という言語文化に内在する、より本質的で独自的な「ものの見方や感じ方」の重要な一側面であるといえるだろう。

3. 「落語的人間観」の可能性

では、このような「落語的人間観」との出会いは、子どもたちにどのような意味を持ちうるのであろうか。それは、日本文化の中に脈々と流れ続け、今の自分たちへとつながる1つの人間観への気づきであり、それによっておこる「人間のありよう」に対する認識の深化・拡充、そして自己形成であるといえる。先に見た通り「落語的人間観」は仏教的思想を色濃く反映する、伝統的な日本文化の根底に流れ続けてきた人間観の1つである。しかし現代の子どもたちが日々の生活の中でどれだけこのような価値観に触れその価値に気がつくことができているだろうか。

「人間は理性の力で自己の「業」を律し、賢く、誠実に生きるべきであり、そこにこそ人間の崇高さ、存在の価値がある」といった、いわば近代的な人間観が強大な力をもつ学校教育、社会教育の中で、それに束縛され続けている現代の子どもたちの人間観は非常に不寛容で硬直的なものとなってはいないであろうか。そして「落語人間観」を見失いつつある私たちの世界は非常に窮屈で息苦しいものになっていないだろうか。子どもたちにとって「落語的人間観」との出会い

は、自己の中に確かにあり、しかし意識化されてこなかった（しないようにしていた）「人間のありよう」に対する可能性の声をエンパワーメントするとともに「自動化した物語」を突き崩す（難波(2008)）契機となることが期待できるのである。

落語の登場人物たちの自由な言動がもたらす「笑い」には、そのような力があるのである。バタイユは次のように指摘する。

> 個々のものがはっきり性格づけられてそれぞれに安定しており、また全般的な安定した秩序の内にあるような世界から、不意にわれわれの確信が覆されるような世界へ急激に移行すると、われわれは結局笑わされるのです。その世界でわれわれは、この確信がまやかしだったこと、すべてが確実に予見しうると思い込んでいたところに予期し得ないもの、予期しえず転覆をもたらすような要素が襲ってきた事に気づくのですが、それが結局はわれわれに最終的真理を知らしめるのです。
>
> (Bataille,1951-1953,p.64)

「落語的人間観」に包まれた落語世界での人物たちのドタバタ劇はいつも私たちを笑わせる。そしてその笑いは私たちが自明のこととしているこの「理性にきちんと支配された世界像、人間像」の真正性を揺さぶり、この世界の、そして私たち人間の「わけのわからなさ」に改めて気付かせてくれるのである。

もちろん近代的な人間観が不要である、「落語的人間観」の方が優れているということではない。これらのみならず多様な「人間観」が個人の内に共存し互いにせめぎあい続ける中で、子どもたちそれぞれが自分なりに人間へのまなざしのありようを問い直し続けていくところに、その認識の深化・拡充は向かうべきであることは言うまでもない。

「落語的人間観」との対話をプロデュースし、その認識の深化・拡充を目指すような授業を展開するためには、これまでのように単発的に一つの作品を取りあげて「同化」を体験させるようなデザインではかなわない。発達段階に応じた形で、物語を「対象化」しながら、そこに内在する「落語的人間観」に気づき、自分なりにそれについて考え、価値づける（典型化）ような学習が必要である。そのためには、落語で描かれる人間像の魅力や自分との共通点を探求的に検討する活動や、「落語人間観」の価値やそれがなぜ語り継がれてきたのかについて考えてみるなどの新しい授業の展開が期待される。

4.成果と課題

本研究では、落語という言語文化に内在する、より本質的で独自的な「ものの見方や感じ方」として「落語的人間観」の存在を明らかにした。この「落語的人間観」との出会いは、「人間観」の問い直し、その深化・拡充へとつながる契機となるものであり、落語の国語科教材としての新たな可能性を拓くものである。

しかし、本研究では、具体的な作品をとりあげての「落語的人間観」に注目した教材分析や、それを軸とした具体的な授業構想などを行うにはいたらなかった。

今回の研究でもちえた視座を踏まえて、「同化」と「対象化」の 2 つの側面から小学校における落語教材の指導のあり様についてさらに実践的に検討を進めていく必要がある。また今回は、優先度が低いと判断してしまった落語を「演じる」という学習ではあるが、多くの先行研究がその可能性や成果を示していることからも、国語科教育への適用の可能性についても検討されることが望まれる。これらの点については今後の課題とする。

【主要参考引用文献】

・荒川恵子他(2008)「幼児の鑑賞教材としての落語の可能性―落語「平林」鑑賞を通して―」『京都女子大学発達教育学部紀要』No.4　pp.63-82

・桂蝶六（2008）「落語のまなざし―人間をどう見るか」『大阪青山大学紀要』Vol.1 pp.91-102 pp29-47

・桂蝶六(2010)「落語表現を教育に活かす―ワークショップレポート」『大阪青山大学紀要』Vol.3 pp.61-74

・桂花團治（2015）「教育に生きる落語の世界」『大阪青山大学紀要』Vol.8 pp53-64

・金井恵子他（2014）「教員養成に落語の力を―早稲田大学教職選択科目「国語科授業技術演習の取り組み―」『早稲田教育評論』Vol.28 No.1 pp.25-42

・幸津國生(2008)『古典落語の人間像』花伝社

・高帛明子（2014）「自己を見つめ、よりよく生きようとする子どもの育成―総合的な学習の時間「落語挑戦との関連を通して―」『上廣道徳教育賞受賞論文集』No.22 pp.169-181

・小林正行他（2014）「〔伝統的な言語文化〕の学習指導改善 －落語教材の検討を通して－」『群馬大学教育実践研究』No.31 pp.235-248
・酒井たか子他（2016）「落語・小咄を利用した日本語学習支援CALLプログラムの開発と試行」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』No.31 pp.69-80
・住岡英毅(2013)「落語文化教育の可能性」『大阪青山大学紀要』Vol.6 pp.29-47
・釈徹宗(2017)『落語に花咲く仏教』朝日新聞出版
・ジョルジュバタイユ(1951-1953)西谷修(訳)(1999)『進呈増補　非知』平凡社
・関山和夫(2001)『庶民芸能と仏教』厚徳社
・高山三千夫(2005)「落語人間学への誘い」『帝京平成フォーラム』No.2　pp.19-28
・立川談志（1985)『『現代落語論』其二　あなたも落語家になれる』三一書房
・冨安慎吾(2018)「伝統的な言語文化に関する学習指導」井上雅彦他編著『初等国語科教育』ミネルヴァ書房所　pp.176-186
・中村昇（2018）『落語―哲学』株式会社亜紀書房
・中山卓(2020)「伝統的な言語文化としての落語教材の可能性」『国語科学習デザイン』Vol.3 No.2 pp.32-41
・難波博孝(2008)『母語教育という思想』世界思想社
・平岡聡(2016)『ブッダと法然』新潮社
・深沢恵子「子どもの意欲を喚起する授業の創造を目指して―「落語」の実践より―」『横浜国立大学国語教育研究』No.36 pp.11-29
・藤山直樹（2012）『落語の国の精神分析』みすず書房
・森真由美（2012）「「落語」を教材とした日本語授業の試み―落語スクリプトに出現する文型・文法の分析―」『金城学院大学論文集人文科学編』Vol.9 No.1 pp.143-158
・森真由美（2017）「言語的および非言語的側面に焦点をあてた「落語で学ぶ」コースデザインの実践―中級日本語学習者を対象とした活動」『金城学院大学論文集人文科学編』Vol.13 No.2 pp.207-230
・吉田章一(2005)「落語の要式性と学生による受容」『帝京平成フォーラム』No.2 pp.15-17

【参考URL】

・秋田県特別支援学校教育研究会HP「演じてみよう～落語「まんじゅうこわい」から～（指導者：柳田栄基、目黒昇子）」
chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/http://www.yuri-s.akita-pref.ed.jp/R2kentokukunken/data/shidouan/data30/fuzoku-c.pdf
（2023.3.15閲覧）
・呉市立広南中学校「伝統文化を受け継ごう」
chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/http://www.kure-city.jp/~hirmc/pilot/H29_S1_2P.pdf（2023.3.15閲覧）
・教育出版指導案ライブラリー『寿限無（読むこと）』
https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/textbook/shou/kokugo/document/ducu2/docu201/2482.html
（2023.3.15閲覧）
・教育出版指導案ライブラリー『ぞろぞろ（文学）』
https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/textbook/shou/kokugo/document/ducu2/docu201/2482.html
（2023.3.15閲覧）
・さいたま市教育研究所HP「本の世界をひろげよう「ぞろぞろ」（指導者：永島清美）（2018.07. 09閲覧、現在閲覧不可）
・福岡県教育センター指導案データベース（中学校 1年、国語科、平成 24 年登録）「落語を演じよう」
http://www.educ.pref.fukuoka.jp/（2023.3.15 閲覧）
・白井市教育委員会HP「落語の問をたたこう！円窓師匠に弟子入り！『ぞろぞろ』読書発表会をしよう」
http://www.e-shiroi.jp/center/sidoan/sidoan.html（2018.07. 09閲覧、現在閲覧不可）
・白井市教育委員会HP「本の世界を広げてよむ『ぞろぞろ』「ブックトークをしよう」」
http://www.e-shiroi.jp/center/sidoan/sidoan.html（2018.07. 09閲覧、現在閲覧不可）
・佐伯市立佐伯小学校HP「お気に入りの落語で、子ども寄せをしよう（指導者：矢田倫一）」
https://syou.oita-ed.jp/saiki/saiki/(2023.3.15閲覧)

【巻末資料】

○落語の教材性に関する先行研究

No	タイトル	著者	年	対象	主な学習活動	教材としての特徴	育成が指摘される資質能力	落語経験者の指導への関与
1	落語人間学へのいざない	高山三千夫	2005	大学生	・映像での鑑賞 ・噺のテーマについて考え、そのテーマは現代でも通じるのか、興味を持った人物とその理由・疑問点をレポートし、授業者が後日解説する	江戸時代から続く庶民の娯楽であり、庶民の息づかいを知るには最適である	語り継がれた噺に内在する「人間の本質」を捉えることで「人間とは何か」について理解を深めることができる。	
2	落語の様式性と学生による受容	吉田章一	2005	大学生	・映像での鑑賞	伝承芸能としての多様性をもつもの		
3	幼児の鑑賞教材としての落語の可能性	荒川恵子	2008	幼児	・所作などについて実践を交えつつ対話的な解説をうける ・実演による鑑賞	一本の扇子や一枚の手ぬぐいを様々なものに見立てて、一人の口演者が話のリズム（間）を微妙に変化させることによって複数の人物の心情を描き分け、簡略化された動作で様々な身体活動を表現する、世界に類を見ない日本固有の芸能形態	イマジネーション、感性、論理的思考力の向上、古典芸能文化の継承	有
4	落語表現を教育に活かす	桂蝶六	2010	小学生・高校生	・「下げ（オチ）」の概念や所作について実演を交えつつ対話的な解説を受ける ・実演にて落語を鑑賞する ・落語を演じる	落語のもつ思想やものの捉え方として「人間の業」を肯定し、お互いの愚かさを認め合い、助け合って生きるというまなざし、そして「怒り」を「困り」や「笑い」に転化するというものがある。「後味」がよい（人の愚かさを笑いながらも最後には救いが残されていたり、過剰に傷つけるようなものではない。	水平的思考をみにつけること、知的好奇心、想像力を養うこと、言語的表現力を向上させること	有
5	子どもの意欲を喚起する授業の創造を目指して	深沢恵子	2012	小学生・高校生	・落語について調べる（資料・インタビュー）（歴史・寄せ小屋・しきたり・道具・昇進・世界の落語・登場人物の魅力など） ・実演にて落語を鑑賞する ・落語家から話し方や基本を、寄席運営に関わる人から落語の歴史や周辺知識について学ぶ ・寄席を運営し、落語を演じる		課題設定力 情報を取り扱う力 コミュニケーション能力 表現力 質問力 運営力	有
6	「落語音読」のススメ落語」を教材とした日本語授業の試み	森真由美	2012	日本語学習者		「落語」教材は文化素材と言語素材の２つの側面をもっており、それらを統合した日本語教育に有効である	文型・文法の習得	
7	落語文化の可能性	住岡英毅	2013			300年余りの歴史をもつ日本の伝統芸能（芸術）の一つ 描かれる人間像や人生観、人がやりとりする相互作用の間合いや倫理・道徳などにおいて、日本人と日本社会の精神性などを色濃く内包している 笑い、人情、倫理、哀愁、癒やし、庶民生活の哀歓や知恵など多様な意味を包含している 「送り手である落語家」と「受け手である観客」とが相互に固有の雰囲気（落語空間）を醸しだし交感するなかで今日まで絶えず変化し続けている	他者理解力 自己表現力 道徳的実践への意欲や態度の向上	
8	教員養成に落語の力を	金井景子他	2014	大学生（教員養成）	・実演にて落語を鑑賞する ・落語を演じる（実演）	テキストを届けるものであり、その発信者の工夫が芸である	基本的な身体技法（発声・発音など）を身につけること 話の段取りを効果的に身につけられるようになること	有
9	〔伝統的な言語文化〕の学習指導改善―落語教材の検討を通して―	小林正行他	2014		・映像にて落語を鑑賞する ・落語の内容について話し合う	噺そのものの特徴としてスジがしっかりした噺であること、「地」の部分を極力省略した会話主体の形式であること 演じ方の特徴として、演者がただ一人で扇や手ぬぐいなどを見立てて、何人もの人物を演じわけること	伝統的な言語文化としての落語に親しむこと 落語に表れた昔の人のものの見方や考え方に触れること	
10	自己を見つめ、よりよく生きようとする子どもの育成	高帛明子	2014	小学生	・落語について調べる ・実演にて鑑賞する ・落語を演じる	落語は一人で演じるが、一人でやるものではない。聞いてくれる人がいてこそ成り立つものであり、その間には「言葉」が存在し、面白さを伝える表現力も必要になる	自分に自信をもつこと	有
11	小学校での落語教育の効果	麻生典子	2015		・落語を演じる		コミュニケーション能力の向上 自己肯定感の獲得	有
12	教育に生きる落語の世界	桂花團治	2015				シンキング（相手の立場に立ったモノの見方、物事を様々な角度からとらえる水平思考を身につけること） イズム（より良い笑い観を獲得すること） スキル（いかに言葉を相手に届けるかというスキルを獲得すること）	
13	落語・小咄を利用した日本語学習支援CALLプログラムの開発と試行	酒井たか子	2016	日本語学習者	・映像にて落語を鑑賞する	日常生活の様子や人間関係など日本文化のエッセンスが凝縮されている 笑いが大切な要素を占めていることで、楽しく日本語を学ぶことができる 一人で何役も演じて会話を中心に物語を進める語り芸の形態は言語学習の面からみると究極のロールプレイといえる。聞き手は会話の場面を意識しながらだれがだれに何をどのように話しているのかを理解することが求められる 登場人物が、男女、年齢、身分、性格などが多様であり、様々な話し方に触れることができる	日本語に関する語学的理解と文化的理解を深めること	
14	「落語音読」のススメ	藤沢良行	2017		・英語で落語を演じる（音読）	上下を使った対話形式での表現が多いこと	英語表現の定着	
15	言語的及び非言語的側面に焦点をあてた「落語で学ぶ」コースデザインの実践	森真由美	2017	日本語学習者	・実演・映像にて落語を鑑賞する ・落語を演じる	「落語」教材は文化素材と言語素材の２つの側面をもっており、それらを統合した日本語教育に有効である 非言語敵文化項目（しぐさや声の調子など）を含むものである	日本文化への理解の促進 文系文法の習得 日本語口頭表現の向上	有

○落語を教材とする学習指導案・実践報告

No	単元名	指導者名	学年	主な学習活動	落語の教材としての特徴	学習の目標・育成が指摘される資質能力	落語経験者の指導への関与
1	落語を演じよう		中１	映像・読解にて落語を鑑賞する 落語を演じる 役割を分担し寄席を運営する		伝統文化である落語に興味をもつこと 話す音量や速度、声の調子や間の取り方、相手にわかりやすい語句の選択、相手や場に応じた言葉遣いなどについての知識を生かすこと 台本における場面の展開や登場人物などの描写に注して読み、内容の理解に役立てること 落語特有のリズムを味わいながら落語の世界に触れること 古典にはいろいろな種類の作品があることを知ること	
2	寿限無（読むこと）		小４	音声にて落語を鑑賞する 落語を演じる（音読）	江戸庶民の話し言葉の味わいが表れている。声にだすことでおもしろさが倍増する。	場面の移り変りや情景を想像しながら笑い話のおもしろさを味わって読むこと	
3	ぞろぞろ（文学）		小４	映像にて落語を鑑賞する 読解にて落語を鑑賞し感想を交流する 落語を演じる（実演）	言葉を聞いて自分の頭の中に映像を思い浮かべるのによい教材。演じる時には身振りや手振りなどの相手をひきつける話し方の技術が求められる。	落語のおもしろさを知り、親しもうとすること 落語を暗唱したり音読したりしながら自分の言葉で表現すること 落語とはどのようなものか、聞いたり調べたりしてまとめることができること 落語が書かれている本を探して読み、そのおもしろさをとらえることができること	
4	落語の門をたたこう！ 円窓師匠に弟子入り！ 『ぞろぞろ』音読発表会をしよう		小４	落語を鑑賞する（CD/読解） 登場人物の気持ちやおもしろさを読み取り、表現にどう生かすかを考える 落語を演じる	日本の伝統的な話芸であり、何人もの登場人物が現れ、会話文を中心にして話が進められる オチを含んでいる	場面の様子がよくわかるように音読することができる力 場面の移り変りに注意しながら、登場人物の気持ちや情景などについて想像しながら読むことができる力 複数の本から自分が興味を持つ話を探し、本の世界を広げて読むことができる	
5	本の世界を広げてよむ 『ぞろぞろ』「ブックトークをしよう」		小３	落語を鑑賞（読解） 感想を交流したり、あらすじや興味のある文、おもしろい文を交流し合う 選んだ本でブックトークをする		紹介したい本を取り上げて説明する力 必要な情報を得るために読んだ内容に関連した他の本や文章などを読む力	
6	本の世界をひろげよう 「ぞろぞろ」	永島清美	小４	落語を鑑賞（読解）内容について話し合う	日本の代表的な話芸である	（おもしろいと思ったこと）を筋道を立てて話すことができる その場の状況や目的に応じた音量や言葉遣いで話し合うことができる	
7	お気に入りの落語で、子供寄席をしよう	矢田倫一	小４	落語を鑑賞（実演）する 読解によって内容の理解を深める 落語を演じる（音読）		文章全体の内容や場面の様子をつかみ、抑揚や強弱をつけたり、会話と会話の間の取り方に気を付けたりしながら音読できる 面白さを伝えるために場面の移り変りに注意しながら登場人物の性格や気持ちを叙述をもとに読むことができる	有
8	演じてみよう～落語「まんじゅうこわい」から～	柳田栄基他	特別支援学校中等部	まんじゅう怖いを自分なりに改編し演じる	日本の伝統芸能の一つであり、軽快な話し方、分かりやすい内容とオチの面白さに特徴がある。身振りや手振りを使った話し言葉で表されており、話し手と聞き手の想像力で噺の世界が広がっていく。	相手に伝わるように声の大きさ、早さ、強弱、身振りや手振り、表情を工夫して表現すること 言葉がもつよさに気付くとともに、落語に親しみ、五感で感じたことを伝えようとすること	
9	伝統文化を受け継ごう～落語に挑戦！～ ※総合的な学習の時間		中1	落語を演じる（実演）	日本の伝統文化を理解できるとともに、軽妙な語り口で、登場人物を生き生きと表現する役割演技、また同時に視線、センス、手ぬぐいのみを使った所作など非言語によるコミュニケーション技術を学ぶ上で有効な題材である。	日本の伝統文化である古典落語の価値と共に伝統文化で大切にされてきた学び方を理解し、その習得・活用を通して表現力を高めると共に、人を楽しませる新しい自分づくりに挑戦すること	有